

## 平戸島におけるキリシタンとカトリックの分布と伝播

今里, 悟之  
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/1516122>

---

出版情報 : 史淵. 152, pp.135-167, 2015-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

九州大学大学院人文科学研究院  
『史淵』第152輯 抜刷  
2015年3月発行

# 平戸島におけるキリシタンと カトリックの分布と伝播

今 里 悟 之

# 平戸島におけるキリシタンと カトリックの分布と伝播

今 里 悟 之

## 1. 序論

平戸島とその周辺地域は、周知の通り、日本で最も早くキリスト教が布教された地域の1つである。近年の世界遺産登録運動の隆盛の中で、この地域のキリシタンやカトリックが再び脚光を浴びつつある（木村2012；松井2012、2013：54-115）。しかしながら、平戸島内における宗教の分布は、集落単位のミクروسケールにまで焦点を絞った場合、相当に複雑である。これまで平戸島に関しては、キリシタン集落（古野1966：263；宮崎1996：viii；長崎県教育委員会1999：82）、カトリック教会（松井2013：40）、キリシタン集落およびカトリック集落（田北1954：2-3；中園2009：18；平戸市教育委員会2009：11）の分布図がそれぞれ提示されている。これらの多くは、現状の変化を考慮してもなお、位置情報や表記内容の一部に欠落や疑問点を含むため、より正確な情報を示して補完する必要がある。

さらに、平戸島におけるキリシタンやカトリックの集落単位での歴史に関しては、研究者による調査報告や一般書にせよ、地元住民による教会記念誌などにせよ、往々にして史資料や引用元が明確な形で示されておらず、不正確な引用や誤記もしばしば見られる。本稿では、対象とする文献の引用元に逐一遡りながら、記述内容を相互に対照し、住民からの聞き取りに基づくと推測される内容を含め、信頼に足ると判断された内容のみについて記述する。本稿の目的は、平戸島のキリシタンやカトリックに関する断片的で幾分錯綜する情報を、筆者自身の聞き取りや観察調査<sup>(1)</sup>も加えて集落ごとに再整理したうえで、分

布や伝播という視点から地域区分を行い、平戸島の宗教の見取図をより明確に示すことである。

近現代のキリシタンについては<sup>(2)</sup>、「かくれキリシタン」「隠れキリシタン」「カクレキリシタン」など、研究者によって表記が異なる（平戸市生月町博物館2009：19；中園2014：19）。さらに、17世紀の禁教以前のものを「キリシタン」、禁教以後から19世紀後半の禁教解除までのものを「潜伏キリシタン」、禁教解除以後のものを「かくれキリシタン」といったように、時代ごとに表記を区別するのが一般的である（平戸市教育委員会2009：54）<sup>(3)</sup>。

本稿では、19世紀後半以降のパリ外国宣教会による再布教（坂井2005：43-48）を受容して現在に至る「カトリック」と区別する観点から、16世紀後半のイエズス会の布教（坂井2005：30-31）による信仰を保持してきた人々を、時代に関わらず「キリシタン」と呼称する。この点では、カトリックとの社会的な区別に重点を置く、野村（1988）の立場に最も近い。平戸島では、いわゆる「かくれキリシタン」の信仰は、少なくとも社会組織の上では現存しない。従来の説では、1992年の根獅子<sup>ねしこ</sup>集落での組織解散が、平戸島におけるキリシタンの歴史の閉幕であるとされる（宮崎2001：151）。

1550年にポルトガル船が平戸に来港して以来の、平戸地域におけるキリスト教の布教状況については、ルイス・フロイスの『日本史』やイエズス会宣教師の書簡集によって明らかである。これらの史料から窺える当時の布教については、時系列的（近藤1936a、1939；板橋1949：52-192、1960；片岡1967：44-54；萩原1987：95-97；中園2009；五野井2013）、あるいは集落別（織田・米倉1951：171-172；瀬野2001：661-668；中園2005；平戸市教育委員会2009：36-38、61-66）に、精粗の程度は様々であるが、すでに多数の言及がある。本稿の第2章と第3章では、それらとの多少の重複を承知しつつ、他の資料も適宜加えた形で、集落または地域ごとに簡潔な再整理を行う。

平戸島は、面積が163.52km<sup>2</sup>で、九州本土から約500m離れているが（図1）、1977年に平戸大橋が開通して本土と陸続きになった（日本離島センター2004：801）。本稿で言及する地域スケールについて小規模なものから順に整理



図1 対象地域の概略

すると、まず「集落」とは、村落共同体（ムラ）にはほぼ該当する。平戸市の場合、現在の行政区にはほぼ一致するが、例外として1つの行政区が複数の集落から構成される場合や、複数の行政区が1つの集落を構成する場合がある。本稿では「キリシタン集落」とは、近世から近現代の大部分を通じて、ほぼ全戸がキリシタンであった集落を指す。また「カトリック集落」とは、近代初頭から現在に至るまで、ほぼ全戸がカトリックである集落を指す。

次に「町」とは、現在の地籍（住所表記）上の範囲を指す。平戸市では多くの場合、1つの町は複数の集落から構成されるが、1つの集落がそのまま町となっている例もある。本稿で町以下に地名を示す場合は、その町の中の特定の集落を指す。また「平戸市街」とは、旧平戸町に、鏡川町・戸石川町・岩の上町の各一部を加えた範囲を指す。さらに「平戸市域」は、平成の大合併後の市域を指し、平戸島・生月島<sup>いきつき</sup>・度島<sup>たくしま</sup>・的山大島<sup>あづち</sup>、および九州本土の一部（旧田平町）から構成される。本稿で用いる「平戸地域」とは、平戸島とその周辺地域という多少漠然とした範囲を指すが、この平戸市域とほぼ同範囲を指す場合が多い。最後に「平戸藩領」は、現在の平戸市に加えて、松浦市・佐々町<sup>さざ</sup>・佐世保市・壱岐市<sup>おじか</sup>・小値賀町（五島列島の一部）および新上五島町の一部にまでわたる範囲を指す（図1・表1）。

表1 旧平戸藩領における明治期以降の行政区画

1878年	1889年	1955年	2005年	本稿で言及する町または地域
平戸町	平戸町	平戸市	平戸市	旧平戸町
平戸村	平戸村			大久保、田助、鏡川、戸石川、岩の上、明の川内
度島村				度島
中野村	中野村			古江、下中野、山中、主師、坊方、中野大久保、川内
獅子村	獅子村			春日、高越、獅子、根獅子、飯良
宝亀村	紐差村			宝亀、木場
紐差村				紐差、深川、迎紐差、大石脇、草積、木ヶ津、大川原
中津良村	中津良村			堤、猪渡谷、上中津良
前津吉村	津吉村			黒島(現佐世保市)
古田村				大佐志、鮎川、津吉
浦志々伎村	志々伎村			
生月村	生月村			壱部免、里免
山田村				山田免
大島村	大島村			
的山村				
田平里村	田平村	野田免、大久保免、岳崎免、福崎免		
小手田村	南田平村	小手田免、萩田免		
下寺村		下寺免、以善免、深月免		
		松浦市	西木場免、里免	
		佐々町		
		佐世保市	江迎町、鹿町町	
		壱岐市		
		小値賀町		
		新上五島町		

注：平戸村は1925年に平戸町に編入、旧生月村は1940年に町制移行、旧田平町は1954年に合併成立。現平戸市以外の市町では、2005年以外に合併したものがある。新上五島町は一部のみが旧平戸藩領。

資料：平戸市教育委員会（2009:4）、平戸市市長室（1967:155-169）、吉島（2004:6-7）、三間（1936a:202-204）

## 2. キリシタンの分布集落

### 1) 大久保町油水・大久保・田助在・中の原<sup>ばる</sup>、岩の上町中の崎

大久保町のキリシタンは、平戸島ではやや特殊な例で、全戸が五島からの移住戸であった（宮崎1998：202、245-246）<sup>(4)</sup>。明治期中頃から第二次大戦の終戦直後にかけて、五島（上五島の旧北魚目村など）からキリシタンが順次移住している<sup>(5)</sup>。油水のキリシタン講には、大久保と岩の上町中の崎からも参加していたとされるが（宮崎1998：247）、少なくとも解散直前の1955年頃には、田助在と中の原からも参加していた。各集落からは数戸ずつ参加しており、主に油水の親戚戸あるいは油水からの再移住戸であった。中の崎には、中の原から再移住したキリシタンが2戸在住していた<sup>(6)</sup>。中の原では、1950年頃にはキリシタン組織が解散し、平戸市街の亀岡神社の氏子を継続しながら寺院の檀家には加わらず、この点で五島系キリシタンの特徴を示している（宮崎1998：246-247）。油水のキリシタンは、1956年頃の解散時に、約半数の戸が中の原と同じ形態を選んだが、残りの戸はカトリックに復活した<sup>(7)</sup>。

### 2) 下中野町

下中野町では、1960年代当時、全戸の約半数にあたる約40戸がキリシタンであった（片岡1967：109）<sup>(8)</sup>。納戸神の保管戸が在来戸（土着戸）であり、生月島とその周辺地域のキリシタンの聖地であった中江ノ島（平戸市教育委員会2009：286-297）から聖水採取（お水採り）をしていたことなどから（宮崎1998：245）<sup>(9)</sup>、在来のキリシタンと推測し得るものの、詳細は不明である。

### 3) 主師町白石<sup>しゅうし</sup>

主師町は、主師<sup>こじゅうし</sup>・小主師<sup>こじゅうし</sup>・山野・白石の4集落から構成され、主師が主師区、それ以外は山野・白石区に属する。白石に関する布教時の記録はなく、キリシタン信仰の定着過程は不明であるが、春日あるいは対岸の生月島から伝播した可能性もある。1960年代当時、白石の7戸全部がキリシタンであり、春日の一部

の戸とともにキリシタン講を行っていた（片岡1967：109-110）。白石と春日は元来、血縁・土地所有・祭礼などの面で密接な関係があった（今里2012：32）<sup>(10)</sup>。

#### 4) 春日町

春日では、1558年に布教が開始されている（フロイス1978a：189）。1561年に教会が建てられ<sup>(11)</sup>、この時点ですでに全戸がキリシタンであった（松田・東光1997：379-380）。1563年には慈悲の組と組頭・世話役が存在し（松田・東光1998a：89-90）、信徒の組織化も進んでいた。春日では、不詳な部分を残すものの、2007年頃にキリシタン講が休止されたようである<sup>(12)</sup>。春日のキリシタン信仰については、いくつかの調査報告がある（立平1981：32-38；浦1981：48；宮崎1998：234-237；今里2012）。

#### 5) たかごえ高越町

高越では、キリシタン信仰が伝えられてきたものの（浦1981：48）、16世紀の宣教師記録には記述が全くない。集落は、海岸から直線距離で約500m、比高で約50m離れており、急峻な高所との印象を与えるため<sup>(13)</sup>、宣教師が着船しなかった可能性もある<sup>(14)</sup>。昭和初期には31戸から成るキリシタン組織があったという（田北1954：259）。高越のキリシタンに関する調査は、現在までほとんど公刊されていない。

#### 6) 獅子町

獅子では、1558年に春日と同時に布教が開始されている（フロイス1978a：189）。1561年にはすでに教会が存在し（松田・東光1997：379）、1563年には慈悲の組と組頭・世話役が存在していた（松田・東光1998a：89-90）。禁教後の1645年には、獅子のキリシタン信者が処刑されている（岸1951：21）<sup>(15)</sup>。獅子では、迫害のためにキリシタン信仰が一旦断絶したが、生月島のキリシタンに指導を依頼して復興したため、生月系キリシタンの信仰様式であったという（片岡1967：111）。1960年代には、約160戸のキリシタンはすべて戸別



の信仰へと衰退しており、他にカトリック7戸、新宗教2戸、安満岳信者20戸（紐差からの移住戸）が存在した（片岡1967：110、117）<sup>(16)</sup>。獅子のキリシタン信仰については、いくつかの調査報告がある（長沼1928：934-969；古野1966：170-173；立平1981：38-42；浦1981：44-46；宮崎1998：237-239）。

### 7) 根獅子町

根獅子では、1563年に十字架が建てられており（村上・柳谷1968：308；フロイス1979：24-25）<sup>(17)</sup>、1566年には教会が存在していた（松田・東光1998b：183）。1645年には、先述の獅子と同様にキリシタン信者が処刑されている（岸1951：21）。昭和初期のキリシタンは約200戸であり（浦川1928：826）、ほぼ全戸がキリシタンであったことがわかる。根獅子では、1992年にキリシタン組織が解散したが（宮崎1998：204）、戸別の信仰は部分的に残存している（今里2013：92）。根獅子は、平戸島のキリシタン集落の中では最も著名であり、調査報告も質量ともに最も充実している（長沼1928：934-969；田北1954：259；古野1966：167-169；片岡1967：111-112、194-196；牧1972；宮崎1998：205-233；川上2008；平戸市教育委員会2009：331-341）。

### 8) 飯良町

飯良では、1558年に春日や獅子とともに布教が開始されている（フロイス1978a：189）。1561年には十字架が建てられ、全戸がキリシタンとなっていた（松田・東光1997：379）。1562年には教会が建てられ（村上・柳谷1968：307-309）、1563年には慈悲の組と組頭・世話役も存在していた（松田・東光1998a：89-90）。飯良のキリシタン信仰については、田北（1954：259）による昭和初期の調査時点で、キリシタン遺物が山中の祠に一括処分されたと報告されていることから、大正期に組織的信仰は途絶えたと考えられている（平戸市教育委員会2009：344）。その後の戸別信仰については若干の調査報告があり、五島からの移住戸の子孫は、五島系キリシタンの様式による祭礼を行っていたという（宮崎1998：239-241）。

### 9) 草積町<sup>くさづみ</sup>

草積のキリシタンについては、16世紀の改宗の伝承（松本1931：2）以外には、江戸初期の処刑に関する伝承や（三間1936b：114）、明治期から昭和初期頃までの状況の断片的な報告があるのみである<sup>(18)</sup>。草積では、ほぼ全戸がキリシタンであり、獅子からの分家戸も含まれていた（宮崎1998：241-244）。

### 10) 木ヶ津町

木ヶ津町には、キリシタン集落は存在しない。ただし、1960年代当時、江戸期に根獅子から移住したキリシタンとその分家が、合わせて4戸あったというが（古野1966：173-174）<sup>(19)</sup>、具体的な集落名（行政区）は不明である。

### 11) 堤町、猪渡谷町<sup>いとや</sup>、上中津良町<sup>かみなかつら</sup>

この3つの町に、キリシタン集落が近現代に存在したという報告はない。堤については、キリシタン集落であるとする説と（片岡1967：61；立平1981：38）、キリシタン集落には含めていない説がある（田北1954：255；片岡1957：35）<sup>(20)</sup>。猪渡谷（糸屋）では、1577年に約20名が受洗しているが（松田・東光1992：53）、その後の状況は不明である<sup>(21)</sup>。堤は江戸期には猪渡谷の枝村であったが（瀬野2001：671）、この1577年の時点で、現在の堤に相当する集落の住民が受洗者に含まれていたかどうかは不明である。上中津良町には、16世紀後半に建てられ寛永年間（1624～44年）に破壊されたと伝えられる教会跡があるが（平戸市教育委員会1988：27）、キリシタン信仰については不詳である。

## 3. キリシタンの根拠地と伝播

### 1) 平戸市街（平戸城下）

次に、平戸島内のキリシタン集落分布の背景として重要な、町場（平戸城下）および周辺の島々の状況を略述する。宣教師記録によれば、1550年から

1551年にかけて、平戸で初めての洗礼者が現れている（フロイス1978b：16-19）。1553年には信者が約200名まで増加しており（松田・東光1997：120-121）、その中の「3人の重立った貴人」の1人が、松浦家重臣の籠手田安経（ドン・アントニオ）であったとされる（近藤1936b：12；中園2009：3）。1557年時点で日本に3カ所ある修道院として、山口と豊後（大分）のほかに平戸が挙げられ（松田・東光1997：264）、同年には山口と豊後の2カ所に続いて平戸にも教会が設けられた（松田・東光1997：191、249-250）。

しかしながら、1561年には松浦氏が公式的な布教を許さなくなったため<sup>(22)</sup>、非公式的な教会が民家に設けられていた（松田・東光1997：382-383）。1564年には再び教会が完成しており（松田・東光1998a：226）<sup>(23)</sup>、1565年には平戸が都（京都）への布教拠点となっていたことも窺われる（松田・東光1998a：324）。平戸領内に関する宣教師書簡は、豊後からのものを除くと、その多くが平戸（城下）から発信されている（松田・東光1997、1998a、1998b）。近現代の平戸市街（旧平戸城下）におけるキリシタンの存在を示す史資料はなく、16世紀末の平戸領内における禁教以降、すべて棄教されたと考えられている。

## 2) 度島

度島は、平戸島の北方約3kmに位置し（図1）、面積は3.47km<sup>2</sup>である（日本離島センター2004：800）。度島では、平戸に次いで、1557年に布教が開始されている（近藤1936b：14）。1561年には、約500名のキリシタンがおり、すでに教会があった（松田・東光1997：375）。同年の宣教師の巡回では、博多からまず度島に寄港し、生月島を経て獅子・飯良・春日と廻り、平戸城下に戻っている（松田・東光1997：375-381）。1564年の記録では、平戸や他の島々の信者が主な祝日のミサのために度島に参集したことや、宣教師の滞在期間が連続10ヵ月に達していたことが判明する（松田・東光1998a：206-213）。同年には度島の全戸がキリシタンであり、生月島とともに聖霊の地と絶賛されている（松田・東光1998a：226-227）。度島は、平戸城下の布教条件が悪化して以降、平戸領内の布教拠点となっていたことがわかる。

度島のキリシタンは、16世紀末にすべて処刑されて断絶したと考えられてきたが（板橋1949：157；田北1954：253）、現在では、1690年の転宗人別記録帳の存在から（岸1951：29）、17世紀まで残留した後に棄教したと考えられている（中園2009：13）。近現代における度島のキリシタンの存在は確認されていないが（織田・米倉1951：172）、キリシタン遺跡については若干の調査報告がある（平戸市教育委員会1988：18-21）。

### 3) 生月島

生月島は、面積が16.55km<sup>2</sup>で、平戸島の北西約1kmに位置するが（図1）、1991年の生月大橋の開通によって平戸島と陸続きとなった（日本離島センター2004：808）。生月島では、1557年に度島とともに布教が開始されている（近藤1936b：14）。1561年には、生月島に約800名のキリシタンがおり、600名以上を収容できる教会や、寺院を転用した小教会が複数存在した（松田・東光1997：377-378）<sup>(24)</sup>。同年には、獅子の聖堂工事のために生月島のキリシタンから大工派遣などの援助が行われており（松田・東光1997：379）、1563年には、春日・獅子・飯良のキリシタンが生月島の教会に告白（告解）に来る配慮もなされていることから（松田・東光1998a：89-90）、生月島が平戸島西岸への布教拠点であったことが窺える。生月島（特に館浦や山田免など）は、近現代における平戸島西岸諸集落の中心地の1つであり（中園2009：18；今里2012：30）、すでに16世紀後半からその地位にあった可能性がある。生月のキリシタンは、先述の度島とともに、信者数の多さ、信仰の熱心さ、盛大な行事などが、宣教師から高い評価を得ていた（松田・東光1998a：89-91、226-227）。

生月島では、キリシタン信仰が多くの集落において現代まで存続し、この点で度島とは対照的である。生月島は、2013年時点で辛うじて唯一現存するキリシタン信仰の存続地域であり（宮崎2014：218）、調査報告の蓄積は九州西北部の旧キリシタン地域の中でも随一である（田北1954：251-488；助野1960；古野1966：101-166；片岡1967；野崎1988：125-145；宮崎1996；長崎県教育委員会1999：109-206；中園2004；平戸市生月町博物館2009）。

#### 4) 16世紀の伝播経路

平戸地域（当時の平戸領内）全体では、1561年の時点で約2,000名のキリシタンが存在し、7～8カ所のキリシタン村落と5～6カ所の教会があったという（松田・東光1997：342、364）。1571年には、教会は14カ所に達していた（松田・東光1998c：117）。1580年から1583年にかけては、4,000～5,000名の信者が維持されているものの、松浦氏の反対と妨害により布教の成果が挙がらず新たな改宗もないと記録され（松田・東光1991：16、180-181、1992：239）、この頃までが布教の最盛期であったと見られる。

16世紀後半の平戸領内の中心地体系では、キリスト教布教を基準とした場合、最上位に平戸城下と度島、中位に生月島、最下位に平戸島西岸の諸集落が位置していた。詳細な伝播経路は不明であるが、1550年頃の平戸城下を起点として、1557年の度島と生月島、1558年の春日・獅子・飯良、1563年の根獅子、1577年の猪渡谷（堤を含む可能性がある）という順序で布教されていった<sup>(25)</sup>。

### 4. カトリックの分布集落

#### 1) 大久保町、田助町

大久保町のうち、田の浦・<sup>こうざき</sup>神崎・潮の浦・油水・曲り・中の原・大久保・小川の諸集落、および田助町田助浦には、それぞれカトリックが数戸から数十戸分布し、中の原・大久保・小川の3集落以外は<sup>かみこうざき</sup>上神崎教会に所属する<sup>(26)</sup>。神崎には、江戸期に<sup>そとめ</sup>外海（長崎県旧外海町）から潜伏キリシタンが移住している（浦川1927：315；片岡1967：61）。明治期に入ると、1880年に黒島から7戸のカトリックが（上神崎小教区100年誌委員会1980：54）、1883年までに五島から16戸のカトリックが移住し、その後も黒島と五島から移住が続いた（平戸尋常高等小学校1917：246-247；上神崎小教区100年誌委員会1980：54-55）。

1891年、大久保町潮の浦に神崎教会が建てられた（カトリック長崎大司教区2008：58）。当時の平戸地域北部では唯一の教会であり、周辺の古江町・主師町山野・生月島などの信徒の海上交通を考慮して、海岸部に建設された<sup>(27)</sup>。

1969年に大久保町中心部の神崎に移転し、名称も上神崎教会に変更された（カトリック長崎大司教区2008：58）<sup>(28)</sup>。油水のカトリックの多くは、明治期から大正期にかけての五島からのキリシタン移住戸であるが、移住後すぐに復活して神崎教会に所属した戸もあれば、1956年頃のキリシタン講の解散時によろやく復活した戸もある<sup>(29)</sup>。

## 2) 平戸市街周辺

平戸市街およびその周辺の、旧平戸町・鏡川町・戸石川町・岩の上町・明の川内町の大部分の集落にはカトリックが多数分布し、大久保町の一部のカトリックとともに、平戸教会（正式名称は平戸ザビエル記念大天使聖ミカエル教会）に所属している<sup>(30)</sup>。1885年に宝亀町のある信徒が平戸市街に移住した当時は、カトリックは未だ皆無であったという<sup>(31)</sup>。1897年から1900年頃にかけて、五島から鏡川町赤坂、戸石川町杉山、岩の上町下大垣などに移住が続き<sup>(32)</sup>、カトリックは総計約40戸に達していた（小崎1992：169）。

平戸市街周辺のカトリックのほとんどは、明治期の五島（旧北魚目村・久賀島・福江島など）からの移住戸であったが、平戸島内の宝亀・紐差・山野からの移住戸も含まれていた<sup>(33)</sup>。当時の移住戸の生業には、田畑の小作（平戸市街周辺の旧士族の所有地）、鰯網の漁撈長や網子、海運、馬車運送、大工、杜氏、精肉店店員、廃品回収、廃尿処理などがあつた<sup>(34)</sup>。当初は神崎教会に所属していたが、1913年には鏡川町西の久保に仮教会が設けられた<sup>(35)</sup>。1931年に平戸教会が完成し（カトリック長崎大司教区2008：54）、神崎教会に代わって平戸地域北部の信仰拠点として成長していった。

## 3) 古江町

古江町は、古江と大瀬の2集落から構成される。大瀬は、ほぼ全戸がカトリックである。1887年頃の移住と伝えられ<sup>(36)</sup>、同一の漁民集団による五島からの集団移住であった<sup>(37)</sup>。1899年に古江教会が建てられている（カトリック長崎大司教区2008：58）。古江にもカトリックが1戸あるが、在来の改宗戸である<sup>(38)</sup>。

#### 4) 山中町、中野大久保町、川内町

山中町のカトリックは、在来の潜伏キリシタンからの復活戸とされるが（100周年誌編集委員会1985：155）<sup>(39)</sup>、詳細は不明である。1868年、浦上の日本人伝道師が住民1名に洗礼を授け、1871年には7戸が信仰を表明している（100周年誌編集委員会1985：155）。1873年当時、中野村に在住していた17戸のカトリックとは（岩崎2013：41）、この山中町のカトリックであると考えられる。1887年に獅子から1戸が、1905年には高越から1戸がそれぞれ移住し、カトリックに加わっている（100周年誌編集委員会1985：74-75）<sup>(40)</sup>。1952年に中野教会が完成した（100周年誌編集委員会1985：157）。中野教会の所属戸としては、中野大久保町と川内町川内浦に各1戸が在住している。前者は古江町大瀬からの移住戸で、後者は旧田平町からの移住戸である<sup>(41)</sup>。

#### 5) 主師町小主師・山野、坊方町

小主師と山野は、いずれも全戸がカトリックである。1820年頃、五島から無住の海岸と林野に総計8～10戸程度の潜伏キリシタンが移住したのが、両集落の始まりである（100周年誌編集委員会1985：135）。1872年に伊王島（現長崎市）の日本人伝道師の導きで山野の住民1名が長崎（大浦天主堂）で洗礼を受け、1887年には山野教会が完成している（100周年誌編集委員会1985：135-137）。坊方町にも、山野からの移住戸が1戸在住している<sup>(42)</sup>。

#### 6) 高越町、獅子町、根獅子町

高越はキリシタン集落であったが、大正期にはカトリックが2戸在住していた（獅子村1918）。ともに、明治初期のある復活戸の子孫であるが、1戸が転出した結果、現在は1戸のみが紐差教会に所属している<sup>(43)</sup>。獅子のカトリック7戸は、すでに大正期には存在していた（獅子村1918）。1866年頃、黒島の日本人伝道師が獅子にも布教に訪れており（100周年誌編集委員会1985：75-76）、この際の復活戸である可能性がある。1975年頃まで獅子教会が存在したが、現在は廃止され、信徒も1戸のみである（キリスト信者発見100周年行事委員

会1965：81、巻末付表)<sup>(44)</sup>。根獅子でも1950年代に初めて復活戸が出ており(市山ほか1982：66)、現在でも2戸がカトリックである<sup>(45)</sup>。この3つの町では、カトリック戸は極めて例外的であることがわかる。なお、飯良では、カトリックへの復活戸は明確には確認されていない<sup>(46)</sup>。

## 7) 宝亀町<sup>うそ</sup>雨蘇・京崎

宝亀町の行政区は4つに分かれ、雨蘇(三区)と京崎(四区)の全戸がカトリックである(今里2013：80)。江戸期に外海から移住した潜伏キリシタンに加え(片岡1967：61；100周年誌編集委員会1985：85)、明治初期の大村<sup>(47)</sup>・黒島(吉田1979：195)・外海・五島(100周年誌編集委員会1985：75)<sup>(48)</sup>からの移住戸が存在する。このほか、在来の潜伏キリシタンからの復活戸や仏教徒からの改宗戸も存在し、江戸期に獅子や根獅子の潜伏キリシタンが雨蘇や京崎に移住したとの伝承もある<sup>(49)</sup>。

1866年頃、黒島の日本人伝道師が、獅子・根獅子・紐差などとともに宝亀で布教した結果、宝亀・紐差・木ヶ津・大佐志の代表数名が、長崎(大浦天主堂)のプチジャン神父を訪問し指示を受けている(100周年誌編集委員会1985：75-76、94)。1867年には宝亀に受洗者が現れ、1869年には伊王島の伝道師による受洗者も確認されている(100周年誌編集委員会1985：76)。1873年に存在した宝亀村72戸のカトリックとは(岩崎2013：41)、この宝亀町と後述の木場町のカトリックであると推測される。当初は黒島や紐差から司祭が巡回していたが<sup>(50)</sup>、1898年には宝亀教会が完成し、翌年に紐差小教区から独立している(100周年誌編集委員会1985：96)。

## 8) 木場町<sup>こば</sup>

木場町は、木場<sup>かんどり</sup>・神鳥・田崎の3集落から構成される。木場では、約半数の戸がカトリックである(宮本1984：171-172；今里2013：80)。江戸期の外海からの移住戸に加え、明治期以降の在来の改宗戸が大部分を占める<sup>(51)</sup>。神鳥でも約半数の戸がカトリックで(今里2013：80)、江戸期の大村からの移住戸、



明治期の田平からの移住戸、在来の改宗戸などが存在する<sup>(52)</sup>。田崎の起源は、神鳥からの分住集落であったという（紐差村1918）。現在では全戸がカトリックで（今里2013：80）、江戸期の大村からの移住戸<sup>(53)</sup>、明治期の外海からの移住戸、在来の改宗戸などが存在する（片岡1967：61）<sup>(54)</sup>。移住時期は不明ながら、浦上からの移住戸もあったとされる<sup>(55)</sup>。大村からのある移住戸は、外海（黒崎・出津）を経て田崎に定着している（市山ほか1982：28）。

木場と田崎では、1871年頃、上述の伊王島の伝道師によって改宗者が現れた（浦川1928：804-805）。1878年、旧紐差村一帯の布教拠点として田崎に仮教会が建てられ（浜崎1959：1；カトリック長崎大司教区2008：56）、当初は黒島教会の巡回教会であった（紐差村1918）。1885年に紐差教会が建てられると（カトリック長崎大司教区2008：56）、田崎教会は紐差教会の巡回教会となったが（キリスト信者発見100周年行事委員会1965：81、巻末付表）、現在では廃止されている。

### 9) 紐差町、深川町、むかえひもさし迎紐差町、おおいしわかき大石脇町、草積町石原田

紐差町では、全ての集落（行政区）にカトリックが在住し、いずれも全戸の約半数から3分の1程度を占める<sup>(56)</sup>。その一部は、江戸期の外海と大村からの移住戸である（浦川1927：315、1928：804）。1799年に、当時の紐差村へ大村領から移住した可能性を示す史料も確認され（岩崎2013：38-39）、絵踏に臨んだ潜伏キリシタンの伝承も残る（市山ほか1982：17）<sup>(57)</sup>。紐差では、明治期にも外海からの移住戸が見られたが（カトリック長崎大司教区2008：56）、宝亀や田崎からのカトリック移住戸が多くを占めるという（市山ほか1982：28）。

1866年頃、先述の黒島の伝道師が紐差や深川でも布教した結果、紐差の代表者が長崎を訪問している（100周年誌編集委員会1985：75-76）<sup>(58)</sup>。1869年には、日本人伝道師を伴って変装した宣教師が紐差で洗礼を受けた（100周年誌編集委員会1985：76、94）。1871年頃、伊王島の伝道師によって紐差や深川にも洗礼志願者が現れたが（浦川1928：804-805）、紐差・深川・なご菜の原（菜の原は紐差町に含まれる）の仏教徒からの改宗戸とは（片岡1967：61）、これら

を指すと思われる。1873年に在住していた紐差村の44戸のカトリックは（岩崎2013：41）、現在の紐差町や深川町などに分布していたものと推測される。1885年、平戸島最初の教会として紐差教会が完成した（カトリック長崎大司教区2008：56）。当時のマタラ神父は、北は佐賀県馬渡島<sup>まだらしま</sup>から南は黒島に至る平戸地域周辺を広く巡回していた（市山ほか1982：20）。

深川では、約半数の戸がカトリックである<sup>(59)</sup>。1871年に受洗者が初めて現れ、順次増加していった（市山ほか1982：26）。迎紐差では、カトリックは数戸のみであり、いずれも在来の改宗者である。大石脇にも、カトリックが数戸あるが、いずれも朶の原からの移住戸である。草積町では、石原田に約10戸のカトリックが在住し、いずれも在来の改宗戸である<sup>(60)</sup>。

#### 10) 木ヶ津町、大川原町雨窪<sup>あまくぼ</sup>

木ヶ津町のカトリックの大部分は、坊主畑（四区）に在住する。坊主畑は全戸がカトリックである（市山ほか1982：36）。江戸期の潜伏キリシタンの移住については不詳であるが、1866年頃、先述の黒島の伝道師の導きで、木ヶ津からも代表者が長崎を訪問している（100周年誌編集委員会1985：75-76）。1871年頃には、先述の伊王島の伝道師によって木ヶ津にも洗礼志願者が現れた（浦川1928：804-805）。明治期には、外海（黒崎）・大村（古野1966：174）や黒島・五島（板橋1949：213；片岡1967：61；吉田1979：218-219；市山ほか1982：36；カトリック長崎大司教区2008：59）からカトリック戸が移住しており、ド・ロ神父の指導による外海（出津）からの移住も見られた（板橋1949：213；片岡1957：46-48）。1873年に在住していた紐差村の44戸のカトリックには（岩崎2013：41）、木勝（木ヶ津）のカトリックも含まれていたと推測される<sup>(61)</sup>。1962年に木ヶ津教会が完成し、紐差教会の巡回教会となった（市山ほか1982：38）。木ヶ津町の二区と三区にも、カトリックが数戸ずつ在住しているが、その多くは坊主畑からの再移住戸である。大川原町雨窪にも、黒島・五島・外海（出津）から移住したカトリックが約10戸在住しており、木ヶ津教会に属している<sup>(62)</sup>。

### 11) 大佐志町、鮎川町大野、津吉町古田

大佐志は、全戸がカトリックである（市山ほか1982：33）。最初の移住戸は外海からのものであり（カトリック長崎大司教区2008：58）、その後も五島（片岡1967：61）や黒島（市山ほか1982：33）から移住が続いた<sup>(63)</sup>。1866年頃、先述の黒島の伝道師によって、大佐志の代表者も長崎を訪問している（100周年誌編集委員会1985：75-76）。1873年当時の古田村の8戸のカトリックとは（岩崎2013：41）、この大佐志の在住戸であると推測される。1911年に大佐志教会が完成し、1994年には鮎川町に移転している（カトリック長崎大司教区2008：58）。鮎川町大野は、全戸がカトリックであり、黒島などからの移住戸から成る。津吉町古田にも、数戸のカトリックが在住するが、黒島などからの移住戸や大佐志からの再移住戸であるという<sup>(64)</sup>。

## 5. 周辺地域のカトリック集落と伝播

### 1) 生月島

生月島のカトリックは、全て在来のキリシタンからの復活戸であるが、キリシタンに比べて圧倒的に少数である。1976年の時点では、生月島全体（2,271世帯）でキリシタンが387戸を数えたのに対して、カトリックは65戸に過ぎなかった（野崎1988：131-133）。カトリックは、主に山田免と壺部免に在住する。山田免では、1872年頃に黒島の日本人伝道師がカトリック復活を知らせ、紐差から来た宣教師（ペルー神父）が変装して布教したというが（松本1931：17-18；片岡1957：39-40）、伝道の効果はなかなか表れなかった（浦川1928：796）。1878年頃には、浦上の日本人伝道師も布教している（片岡1957：40）。同年に初めて洗礼者が現れ、1880年に仮教会が、1912年には山田教会が完成した（カトリック長崎大司教区2008：57）。壺部免では、1879年に上述の黒島の伝道師によって復活戸が現れ（カトリック長崎大司教区2008：60）、1942年に教会が完成している（カトリック山田教会献堂100周年実行委員会2012：72）。

## 2) 黒島

黒島は、平戸島の南東約10kmに位置し（図1）、面積は4.60km<sup>2</sup>である（日本離島センター 2004：813）。旧平戸藩領であり、1885年までは平戸島の前津吉村に属していた（西向1961：17）。その後、黒島村として独立し、1954年に佐世保市に編入された（西向1961：21）。島内の8集落のうち、全戸カトリックが6集落（日本離島センター 2004：814）、一部カトリックが1集落である（斎藤1961：110）。黒島へのキリシタン定住の嚆矢は、平戸藩士による大村領経由の亡命であるとされる（片岡1957：41）。寛政年間（1789～1801年）には、外海（黒崎）・大村・針尾島から潜伏キリシタンが移住している（浦川1928：285-286；西向1961：14-15）。針尾島からの移住は、平戸藩の牧野を転用した開発の一環であり、1829年にも大村藩領からの移住が確認されている（岩崎2013：40-41）。

1865年、キリシタン20名が長崎（大浦天主堂）で信仰告白を行い（カトリック長崎大司教区2008：44）、それ以降、住民が頻繁に長崎へ赴き教理を学んだ（浦川1928：286）。1868年には、五島（久賀島）から迫害を逃れたキリシタンも移住している（西向1961：15）。1873年には、黒島のカトリックは193戸に達し、周辺地域一帯の中で最多の信者数であった（岩崎2013：41）。1878年には、平戸島よりも早く教会が完成している（片岡1957：43）。

## 3) 田平地域

平戸市田平町は、九州本土に位置するものの（図1）、旧平戸藩領であり、黒島と同様に平戸島との関係が深かった。16世紀中頃までは、先述した籠手田氏の領地があった時期がある（片岡1957：44）。1873年の禁教解除当時、約10戸のキリシタンの存在が明らかとなり、その一部は平戸島からの移住戸であったという（浜崎1959：1）<sup>(65)</sup>。これらの戸は、カトリックへの復活戸も含め、地元住民によって平戸島の紐差・京崎・神鳥・木ヶ津などに追放されたため（浜崎1959：1-4）、田平地域のカトリックは一旦ほぼ断絶したことになる。

やや時期を置いた1886年から1888年にかけて、ラゲ神父の指導によって黒

島から、さらにド・ロ神父の指導によって外海（出津）から、それぞれカトリックが移住した（片岡1957：46-47；浜崎1959：4）。その後、明治・大正期を通じて、外海（黒崎・出津）・黒島・五島のほか、平戸島（上神崎・中野・宝亀・紐差）<sup>(66)</sup> などから、小手田・荻田・下寺・以善<sup>いよし</sup>・深月・野田・大久保・岳崎などの各免にカトリックが移住した（浜崎1959：5-7、巻頭付図）。1888年に仮教会が設けられ、1918年には小手田免に田平教会が完成し（旧称は瀬戸山教会および南田平教会）、1952年には田平地域北部の信徒のために平戸口教会も完成している（カトリック長崎大司教区2008：60）。福崎免には、明治期中頃に黒島・外海・五島からカトリックが移住し、福崎教会が立地している（カトリック長崎大司教区2008：59）。

田平町に隣接する松浦市御厨町も、旧平戸藩領である。西木場免は、田平地域への移住者が明治末期に再移住した所であり、1949年に西木場教会が完成している（カトリック長崎大司教区2008：59）。里免の御厨教会は、北松炭田の炭鉱労働者のために建築されたものである（カトリック長崎大司教区2008：59）。北松炭田の採掘には、旧江迎町や旧鹿町町（現佐世保市）などの炭鉱も含め、1950年代から1960年代にかけて、平戸島のカトリックの出稼者も従事していた<sup>(67)</sup>。この地域の炭鉱労働者のために建設された教会としては、他に江迎教会や潜竜教会があり（カトリック長崎大司教区2008：60）、教会の存在がカトリックの人口移動に、一定の役割を果たしていたことが窺える。

#### 4) 19世紀の伝播経路

以上から、平戸地域へのカトリックの伝播経路は<sup>(68)</sup>、以下の2通りに要約し得る。第1は、黒島や伊王島などを通じた長崎からの伝播である。集落別の伝播元を順に述べると、1866年に紐差・宝亀・木ヶ津（坊主畑）・大佐志が黒島から、1868年に山中が浦上から、1871年に木場・田崎・深川が伊王島から、1872年に山野が伊王島から、1878年に生月島山田免が黒島から、1879年に生月島壺部免が黒島からである。黒島では、1865年の長崎での信徒発見直後に、カトリックに復活している。伊王島のカトリックは、江戸期の外海などからの

移住戸であり、1866年頃には代表者が浦上（現在の長崎市本原町）で教理を学んでいる（浦川1928：80-81）。生月島は、16世紀後半のキリシタンの伝播に際しては大きな役割を果たしたが、19世紀後半のカトリック復活は平戸地域の中では遅く、復活戸も少数に止まった。以上のカトリックの受容戸の多くは、外海・大村・黒島・五島から移住した潜伏キリシタンであった。

第2は、他地域からのカトリック信徒の移住による伝播である。地域別に順次述べると、1880年以降に大久保と田助の諸集落が黒島・五島から、1885年以降に平戸市街周辺が五島・平戸島内から、1886年以降に田平地域の諸集落が外海・黒島・五島・平戸島内から、1887年頃に古江町大瀬が五島からである。これらの集落は、いずれも平戸地域の北部に位置する。宝亀・紐差・木ヶ津などでは、すでにカトリックへの復活や改宗が現れた後にも、外海・大村・黒島・五島などからカトリックが順次移住し、信徒の更なる増加をみた<sup>(69)</sup>。

このような移住は、一次移動のみではない。岩の上町のあるカトリック戸の場合、1909年6月に五島（久賀島）から平戸島の現古江町へ、翌年5月に九州本土の現田平町野田免へ、同年11月に平戸島の現岩の上町へ、順次移住している<sup>(70)</sup>。すでにカトリックが在住していた集落の中から、カトリック信徒間の情報網を利用して、最適の定住地を模索した結果である<sup>(71)</sup>。この戸は、五島への移住前には外海に在住していた<sup>(72)</sup>。18世紀後半以降の外海（大村領）から五島への移住は周知の事柄であるが（古野1966：196；片岡1967：98-100；岩崎2013：42-57）、中園（2012：5）が指摘する、五島を経由した外海系キリシタンの平戸地域への拡散が、この例からも窺える。

## 6. 考察と結論

以上の伝播や移住の背景を、まずキリシタンについて要約する。平戸島西岸にキリシタン集落が分布してきたのは、籠手田氏・壺部氏の庇護の下での16世紀後半のイエズス会による布教と（塙1933：28；中園2009：2-14；五野井2013：81）<sup>(73)</sup>、近世から近現代を通じたキリシタン信仰の保持の結果である

(中園2009:14-20)。これらの集落では、ごく少数の例外を除き、19世紀後半以降もカトリックへの復活戸は出ていない。根獅子に代表されるような組織的なキリシタン信仰が保持されてきたこと、カトリックの布教拠点であった黒島や紐差などからは相対的に遠方であったことが、背景として考えられる。大久保町・田助町の場合は、近現代を通じて移住を繰り返してきた、五島系キリシタンの移住行動の一環として理解し得る。宮崎(2001:147-148)が示唆する通り、近現代の平戸島には、「生月・平戸系」と「浦上・外海系」(中園2012)という、2系統のキリシタンが存在したことになる<sup>(74)</sup>。

次に、カトリックの伝播(移住)の歴史的背景について述べる。第1は、移住のための可住地の存在である。旧平戸藩領には、神崎・生属・春日・江袋・しとねざき褥崎・黒島など、台地上に藩営牧が多数分布していた(小林・野口1983:27-30)。このような牧野には、しばしばキリシタン(カトリック)が後に移住しており(中園2011:15)、本稿に関係するものとして神崎・生属(生月)・黒島を挙げ得る<sup>(75)</sup>。このような牧野以外にも、一定の台地があれば移住している例として、主師町山野、宝亀町雨蘇・京崎、木ヶ津町坊主畑、大川原町雨窪、鮎川町大野などがある<sup>(76)</sup>。

第2は、海を通じた経済圏(中園2011)や文化圏(野村1988:197-198)の存在である。外海や五島などを含めた広域スケールでは、生月の鯨組による藩際捕鯨や(末田2004:263-272)、外海を拠点とする捕鯨関連の海運などを挙げ得る(岩崎2013:34-36)。平戸市街周辺の五島からの移住戸には、鯨組の山見番や漁撈長・海運業などの経験者が多数含まれる<sup>(77)</sup>。これらには、近世における外海から五島への移住戸の属性(岩崎2013:52-54)と共通する点があり、キリシタンあるいはカトリックの一部に見られた海民としての属性が、移住を促進したと考えられる。

最後に、宗教を基準とした平戸島の地域区分を行う(図2・表2)<sup>(78)</sup>。第1は、北部地域である。主に明治期以降に五島・黒島などからカトリックが移住した結果、半島部の集落(大久保町・田助町)や平戸市街周辺に、カトリックが広く散在する<sup>(79)</sup>。特に大瀬・小主師・山野では、カトリック集落が形成されて



図2 平戸地域におけるキリシタンとカトリックの分布

注：平戸市街と大久保町については、油水を除き、集落名を省略した。  
 少数戸のみの分布集落は省略した。キリシタン信仰は、生月島を除き、  
 組織的には現存しない。  
 資料：平戸市教育委員会（2009：11）の原図に本稿の知見を加えて修正。

いる。キリシタンとカトリックが多数混在していた油水は、平戸島内では特異な例である。この北部地域は、度島を含めて、16世紀後半のキリスト教布教の中心地であった。キリシタン信仰は禁教時代にほぼ断絶したものの、特定の集落（下中野）の一部の戸が、近現代を通じて継承してきた。

第2は、中部西岸地域である。16世紀後半にキリスト教が伝播し、数百年にわたってキリシタン信仰を組織的に継承してきた集落（白石・春日・高越・獅子・根獅子・飯良）が連続的に分布する。内陸部の草積も、この地域に含み得る。キリスト教布教の中間拠点であった生月島に近かったことも、キリシタン



表2 平戸地域におけるキリスト教の伝播と信者の移住元

地域	集落	宗教	教会	伝播	移住元						在来			
					江戸期			明治期以降			復活	改宗		
					外海	大村	五島	外海	大村	黒島			五島	田平
伊王島		△	☆	1866	○									
黒島		◇△	☆	1865	○	○								
田平		△	☆	—				○		○				
度島				1557										
生月島		▲△	☆	1557										○
北部	大久保町	△▲	☆		○				○	○				
	田助町	△								○				
	旧平戸町	△		1550								○		
	鏡川町	△	☆							○		○		
	戸石川町	△								○		○		
	岩の上町	△▼								○		○		
	明の川内町	△								○				
	川内町	▽									○			
	中野大久保町	▽										○		
	古江町大瀬	◇	☆								○			
	古江町古江	▽		—										○
	下中野町	▲		—										
	山中町	△	☆	1868									○	
	坊方町	▽											○	
	主師町小主師	◇		—									○	
	主師町山野	◇	☆	1872									○	
中部西岸	主師町白石	★		—										
	春日町	★		1558										
	高越町	★▽		—										○
	獅子町	★▽		1558										○
	根獅子町	★▽		1563										○
	飯良町	★		1558										
	草積町草積	★		—										
中部東岸	宝亀町雨蘇・京崎	◇	☆	1866	○			○	○	○	○	○	○	○
	木場町木場	△		1871	○									○
	木場町神鳥	△		—										○
	木場町田崎	◇		1871				○						○
	紐差町	△	☆	1866	○	○		○						○
	深川町	△		1871						○				○
	迎紐差町	△		—										○
	大石脇町	△												○
	草積町石原田	△		—										○
	木ヶ津町	△▼												
	木ヶ津町坊主畑	◇	☆	1866				○	○	○	○			
	大川原町雨窪	△		—				○		○	○			
南部	堤町													
	猪渡谷町			1577										
	上中津良町			—										
	津吉町古田	▽		—						○				
	鮎川町大野	◇		—						○				
	大佐志町	◇	☆	1866	○					○	○			

注：黒印はキリシタン（★ほぼ全戸・▲一部戸・▼少数戸）、白印はカトリック（◇ほぼ全戸・△一部戸・▽少数戸）。教会は主任教会または巡回教会で、1つの地域内に複数の場合がある。伝播は西暦年（16世紀はキリシタン、19世紀はカトリック）で、—は年号不明。移住元は江戸期（潜伏キリシタン）と明治期（カトリックまたはキリシタン）の該当地を○で示し、「平戸」とは平戸島内を指す。在来のキリシタンからの復活戸と仏教徒からの改宗戸も○で示した。キリシタン・カトリックの不在集落は本表から省略。伊王島と黒島は参考のために含めた。

信仰が浸透した背景と考えられる。この地域では、カトリックへの復活戸は極めて限られていた。

第3は、中部東岸地域である。19世紀後半のキリスト教再布教の影響を最も強く受け、各集落に占めるカトリック戸数の割合が他地域に比べて高い。特に宝亀（雨蘇・京崎）・木場（田崎）・木ヶ津（坊主畑）では、カトリック集落が形成されている。平戸島の中では、再布教の拠点であった長崎や黒島から相対的に近く、伝播の近接効果が働いていた。多くの集落では、江戸期から明治期にかけての島外（外海・大村・黒島・五島など）からの移住戸と、在来（仏教徒）の改宗戸が混在している。平戸島内での再布教の拠点となった紐差とその周辺集落（田崎・木場・深川・迎紐差・石原田など）では、在来の改宗戸が他地域に比べてかなり多い。

第4は、南部地域である。西岸の一部の集落（大佐志・大野・古田）を例外として、キリシタンやカトリックはほとんど存在しない。この地域の多くの集落では、キリスト教の影響を全く受けない、平戸島における宗教のより古い形態を残している可能性がある。カトリックが在住する上記3集落に限っては、むしろ北部地域の集落に類似している。

以上のような基礎作業を基盤として、個別の集落における事実をより正確に確定して行くことが、次の課題となるであろう。

【謝辞】 現地調査でご助力を賜りました、平戸市役所の松田隆也文化観光部長・萩原博文元学術専門幹・植野健治氏、平戸市生月町博物館の中園成生先生、尾上種治氏・白濱 勝氏（大久保町）、土田好江氏（鏡川町）、赤波江洗太郎氏（戸石川町）、松本久幸氏（岩の上町）、松尾良治氏・藤澤 傳氏（宝亀町）、加藤 清氏・前田秀美氏・田崎 愿氏・松山幸雄氏（木場町）、前田 勝氏（春日町）、山浦鶴靖氏（高越町）、川上茂次氏（根獅子町）、村田銀一氏（飯良町）をはじめとする平戸市の皆様方に、厚く御礼申し上げます。研究に際しては、文部科学省平成23～26年度科学研究費補助金（基盤研究C、研究代表者・今里悟之、課題番号23520952）の一部を使用した。

## 注

- (1) 現地調査は、2010年8月から2014年11月にかけて18回にわたって実施した。
- (2) 少なくとも近現代のキリシタン集落では、キリシタン信仰のみが存在したわけではな

い。平戸島ではキリシタン集落においても、神道と仏教のほか、山法師（真言宗醍醐派）・琵琶法師（天台宗玄清法流）・巫女（神理教などの神道系新宗教）などの民間宗教者による多数の宗教が並存してきた（井之口1966：牧1972；桜井1977：193-206；宮本1984：156-179；高見2006：27-57；今里2012）。

- (3) キリシタンに関する呼称は、時代区分とも密接に関わる。片岡（1967：11-20）は、1613年（徳川幕府の禁教令）から1865年（信徒発見）までを「潜伏キリシタン」、それ以降を「かくれキリシタン」とする。宮崎（2001：18-21）は、1644年（日本に宣教師が消滅）以前を「キリシタン」、それ以降から1873年（明治の禁教解除）までを「潜伏キリシタン」、それ以降を「カクレキリシタン」とする。この「カクレキリシタン」の呼称には異論もある（中園2014：19）。中園（2013：395-396）は、布教側の有無を基準に、1644年以前を「キリシタン」、それ以降を「かくれキリシタン」としている。平戸市教育委員会（2009：54）は、平戸地域のキリシタン史として、籠手田氏・壹部氏の長崎亡命（1599年）から1644年までをキリシタン時代から禁教・潜伏時代への移行期間、1865年から1873年までを復活時代への移行期間としており、時代区分としては最も首肯しやすい。
- (4) 宮崎（1998）による平戸市のキリシタンに関する調査内容は、長崎県全体の報告書や（長崎県教育委員会1999：81-108）、記述を簡略化した一般書（宮崎2001：141-190）にも収録されている。
- (5) 油水における聞き取り、および宮崎（1998：246-247）による。宮崎（1998：203）は、『平戸郷土史』（『平戸郷土誌』の誤記と思われる）を引用する形で、1883年に五島曾根（現在の新上五島町の曾根郷）の16戸が黒島住民からの教示によって油水へ移住したと述べているが、『平戸郷土誌』にはそのような記述はなく、同年に神崎に五島から16戸が初めて移住したという趣旨の記述があるのみである（平戸尋常高等小学校1917：246-247）。曾根の住民が黒島の住民から油水についての教示を得たという内容は、上神崎小教区100年誌委員会（1980：39）の記述に見られる。
- (6) 以上の記述は、油水における聞き取りによる。
- (7) 油水における聞き取りによる。
- (8) 1961年時点で、旧中野村のある集落にキリシタンが在住していたとの記録があり（お告げのマリア修道会1980：26）、この下中野町のキリシタンを指す可能性がある。
- (9) 宮崎（1998：244-245）は、聞き取りの話者は「下中野古江町」在住としているが、下中野の集落の一部に古江町の地籍が入り組んでいるためである（ゼンリン『住宅地図・長崎県平戸市1』2013年）。田北（1954：255）が述べる、キリシタンが在住する「中野村に属する玄海沿いの数個の小部落」とは、この下中野町や後述の主師町白石などを指すと推測されるが、外海（黒崎）からの移住戸が含まれるとする点は疑問である。
- (10) 春日の一部は、白石からの分家戸あるいは移住戸である。
- (11) 16世紀後半の平戸地域の教会は、既存の寺院が転用された例もあるが（松田・東光1997：297）、このように新たに建設された例もある。

- (12) 春日における聞き取りによる。ただし、キリシタン講は現存していると認識する住民も存在する。
- (13) 2万5千分の1地形図「紐差」、および観察調査による。
- (14) 宣教師記録では、高越は春日に含まれて記された、との解釈もある（田北1954：259）。なお、高越に関する史料の初出は1656年であり（平戸市教育委員会2009：63）、布教当時はまだ集落が存在しなかった可能性もある。
- (15) 宮崎（1998：203）は、獅子のキリシタンの一部は、寛永年間（1624～1644年）に五島から移住した戸の子孫であることを示唆している。出典として引用された『獅子村郷土誌』（獅子村1918）には、寛永2（1625）年頃に五島から獅子村に移住したある一族による伝道の結果、根獅子などでキリシタン信仰が隆盛したという趣旨の記述がある。それが事実であれば、平戸島西岸諸集落におけるキリシタン信仰の浸透は、16世紀後半の宣教師によるもの以外に、17世紀前半の五島からの移住戸による貢献が大きいことになるが、禁教時代という背景を考慮すると安易には首肯し難い。
- (16) この安満岳信者とは、平戸島の安満岳で修行した山法師（ヤンボシ）などの民間宗教者への帰依を指すと推測される。
- (17) 現在の根獅子集落の実質的な領域は、大石脇地籍のほぼ西半分に及んでおり、十字架が建てられた「ウイシワキ」（村上・柳谷1968：308）、さらに「獅子と飯良の間にある一村」（フロイス1979：25）とは、根獅子のことであると推定される。ここでいう実質的な領域とは、土地所有や民俗行事（領域認知を示す道切り行事）などに基づいて画定されるものを指す。根獅子住民が祭る「ウシワキ様」の小祠、根獅子の氏神である八幡神社なども、地籍上は大石脇町に属する。昭文社『長崎県道路地図』（2010年）、地籍図、聞き取り、観察による。
- (18) 田北（1954：255）は、草積南部におけるキリシタンの存在を早くから指摘し、外海（黒崎）・五島からの移住者であるとするが、草積でも中江ノ島で聖水採取を行っていることから（宮崎1998：243）、在来のキリシタンである可能性が高い。
- (19) 田北（1954：255）が述べる木ヶ津東部のキリシタンとは、これを指すと思われる。
- (20) 両説の違いは「獅子、根獅子、高越あげて物言うな。飯良が聞いたら口や堤。」という、俗謡の解釈の違いにも起因すると思われる。
- (21) 1598年には、堤も含めた猪渡谷のキリシタン200名が長崎に逃亡したとされるが（瀬野2001：671）、出典とされる『平戸藩史考』にはそのような記述は見当たらず、慶長3（1598）年に籠手田氏や壱部氏とともに「糸屋某」が長崎に逃れた、という趣旨の記述が見られるのみである（三間1936b：231）。また『平戸之光』にも、ほぼ同様の記述があるが、年号は慶長4（1599）年となっている（埴1933：17）。いずれの文献でも出典は不明である。
- (22) 1561年のいわゆる「宮の前事件」などの影響と思われる。
- (23) この教会が、いわゆる天門寺であるとされる（松田・東光1998b：45-46；平戸市教育委員会1988：11-14）。

- (24) 平戸市教育委員会（2009：38）は、当時の教会の所在地を山田免・里免堺目・壱部免の3ヵ所と推定している。
- (25) この点については立平（1981：39）が、平戸・度島・生月から平戸島西岸諸集落への信仰の拡散と、その際の海上交通による南下を、すでに指摘している。
- (26) 上神崎小教区100年誌委員会（1980：92-93）、およびカトリック教会平戸地区評議会の役員経験者（以下、地区評議会役員と略記）への聞き取りによる。
- (27) 赤波江洗太郎氏（戸石川町）による未刊原稿『平戸教会の礎』（2011年作成）の16頁による。この原稿の主要部分は、赤波江氏による平戸教会関係の内部資料の整理と平戸教会信徒への聞き取りに基づいている。
- (28) 佐世保市小佐々町にある、同名の神崎教会と区別するためであると思われる。
- (29) 油水における聞き取りによる。油水の共同墓地のカトリック墓のうち、石文の年号が確認できる最古のものは、明治44（1911）年である（観察調査による）。
- (30) 地区評議会役員への聞き取りによる。
- (31) 前掲（27）、16頁。
- (32) 前掲（27）、16頁。
- (33) 鏡川町・戸石川町・岩の上町における聞き取りによる。特に旧平戸町に現住するカトリックは、平戸島内から移住した会社員や公務員が多くを占めるという。
- (34) 前掲（27）、26-29頁、および鏡川町・戸石川町・岩の上町における聞き取りによる。
- (35) 前掲（27）、16-18頁。
- (36) 前掲（27）、16頁
- (37) 地区評議会役員への聞き取りによる。この五島の漁民集団は、東シナ海や山陰沖などにも出漁しており、漁業基地としての利便性から大瀬を定住地として選んだという。この漁民集団は1戸の仏教戸を含んでおり、現在に至っている。大瀬には、江戸期に潜伏キリシタンがいたとされるが（カトリック長崎大司教区2008：58）、詳細は不明である。
- (38) 地区評議会役員への聞き取りによる。
- (39) 100周年誌編集委員会（1985：74）が記す「根獅子と系統を同じくする土着キリシタン」とは、根獅子からの移住者という意味なのか、16世紀後半以来のキリシタン信仰を受け継ぐ在来の平戸島住民という意味なのか、詳細は不明である。
- (40) 山中町に移住後にカトリックに復活したのか、移住前からの復活戸が移住してきたものかは不明である。高越の場合、移住戸と同姓の戸がカトリックとして高越に現住していることから、後者の可能性が高い。
- (41) 地区評議会役員への聞き取りによる。
- (42) 地区評議会役員への聞き取りによる。
- (43) 高越における聞き取りによる。この復活戸は、木場町のカトリックと婚姻した際に復活したという。平戸市教育委員会（2009：384）も、高越のカトリックは明治期に改宗（復活）したとしている。

- (44) 地区評議会役員への聞き取りによる。
- (45) 地区評議会役員への聞き取りによる。
- (46) 飯良における聞き取りによる。飯良には明治期に「ふらん寺<sup>じ</sup>」があり、その跡地は現在でも「ふらん野<sup>の</sup>」と呼ばれている。これは「フランス寺」すなわちパリ外国宣教会の布教拠点であったと推測されるが、当時実際にカトリックへの復活戸がどの程度現れたのかは不明である。
- (47) 以下で「大村」という場合、現在の長崎県大村市周辺を主に指すが、外海地方の大部分も旧大村藩領であり（岩崎2013）、史資料によっては後者を指す可能性も否定できない。
- (48) 100周年誌編集委員会（1985：75）が記す、移住元の1つである木場集落とは、現在の長崎市浦上付近の木場町のほか、大村市内の木場地区（浦川1928：2）である可能性もある。
- (49) 以上は、京崎における聞き取り、および100周年誌編集委員会（1985：75）による。京崎のある戸は、宝亀町二区の在来戸（仏教徒）の分家であるが、2代前の当主が1875年に受洗している。宝亀町には、江戸期の絵踏に臨んだ潜伏キリシタンの伝承が残るが（100周年誌編集委員会1985：74）、江戸期の外海などからの移住戸なのか、在来のキリシタンなのか、詳細は不明である。現在、宝亀の観音堂にはマリア観音が保管されているが、宝亀の潜伏キリシタンがカトリックに復活した際に処置に困って預けたものと伝えられる。川口（2013：470）は、宝亀のカトリック集落を、外海系の潜伏キリシタンが形成した集落と類型化しているが、むしろ外海・五島・黒島・平戸島などの多数の系列の混成型と言うべきかもしれない。
- (50) 京崎における聞き取りによる。
- (51) 木場および宝亀における聞き取りによる。木場の改宗戸の多くは、親戚関係にある田崎のカトリック戸からの勧誘によるものである。また、ある戸の場合、4代前の当主が神鳥のカトリックとの婚姻時に改宗したという。
- (52) 神鳥における聞き取りによる。神鳥の改宗戸には、僧侶も含まれていたという。
- (53) 田崎における聞き取りによる。ある戸は、現当主の5代前に大村藩領から移住しており、5代前の当主は洗礼名を持たないことから、当初は潜伏キリシタンであったと推測される。
- (54) 木場における聞き取りによれば、田崎のカトリック戸は、改宗以前は木場の矢保佐神社の氏子であったという。
- (55) 田崎における聞き取りによる。
- (56) 市山ほか（1982：88）、および地区評議会役員への聞き取りによる。
- (57) 浦川（1928：804）が記す、旧紐差村に在住していた根獅子と同系統の土着民とは、根獅子からの移住戸という意味なのか、根獅子と同様の在来キリシタンという意味なのか、正確には不明である。中園（2009：20）が指摘する通り、浦川の記述の根拠は不明である。

- (58) 紐差では、すでに1865年に宣教師による洗礼者が現れていたとの説もある（浜崎1959：1）。
- (59) 地区評議会役員への聞き取りによる。深川の洗礼戸には、潜伏キリシタンからの復活戸と仏教徒からの改宗戸の両方が含まれていたようであるが（市山ほか1982：26）、詳細は不明である。
- (60) 以上の記述は、地区評議会役員への聞き取りによる。
- (61) 以上の諸文献に見られる木ヶ津とは、坊主畑のことを指していると考えられる。なお、1869年に在住していた木ヶ津の潜伏キリシタンについては（板橋1949：205）、坊主畑のものかどうかは不明である。
- (62) 以上の記述は、地区評議会役員への聞き取りによる。
- (63) カトリック長崎大司教区（2008：58）は最初の移住時期を明治初期頃としているが、100周年誌編集委員会（1985：75-76）の記述との整合性を考慮すると、江戸末期であった可能性がある。なお、板橋（1949：214）は明治初期に浦上から移住したとしている。
- (64) 以上の記述は、地区評議会役員への聞き取りによる。
- (65) その他の潜伏キリシタンについては、幕末に九州西北部で広く見られた外海からの移住者である可能性もある。
- (66) 移住者の姓名などから判断して、宝亀とは雨蘇または京崎、中野とは主師町山野を指すと推測される。
- (67) 京崎における聞き取りによる。京崎には1960年頃まで、海運業を営むカトリック住民もおり、江迎（北松炭田）から大阪方面まで石炭を運んでいたという。
- (68) この場合の伝播時点は、各集落における最初の洗礼者が現れた時点、あるいはその直接の契機となった復活告知などが行われた時点とみなす。
- (69) 逆に平戸島からの移住としては、新上五島町の桐古里郷きりふるさとや佐賀県唐津市の馬渡島などの例が知られている（長崎県教育委員会1999：41；野村1988：268）。
- (70) 岩の上町の松本久幸家所蔵の戸籍簿複写による。
- (71) 岩の上町における聞き取りによる。
- (72) 岩の上町における聞き取りによる。
- (73) 中園（2004：2）は、生月島南部・度島・春日・獅子・飯良を籠手田領、生月島北部・根獅子・猪渡谷を壱部領としている。籠手田領については、近藤（1933：34）の注釈に基づくとと思われる。近藤も出典を明示していないが、フロイス（1978a：247）の記述などに基づくと推測される。
- (74) 五島のキリシタンのほとんどは、外海からの移住戸であるため、中園（2012）の説では「浦上・外海系」に含まれる。宮崎（2001：147）は、前者を「平戸・生月系」、後者を「長崎・外海・五島系」としている。この類型化の元となったと思われる片岡（1967：102）の説では、後者が「外海・五島・長崎系」とされている。
- (75) 宮本（1972：172）は、春日の藩牧跡地にもカトリックが入植したとしているが、春

日では、第二次大戦後に引揚者による開拓団が入植したものの、それ以前に潜伏キリシタンやカトリックは移住していない。

- (76) 2万5千分の1地形図「生月」「肥前川内」「紐差」「志々伎」による。
- (77) 鏡川町における聞き取りによる。
- (78) これらの地域区分は、平戸島で慣例的に用いられてきた北部・中部・南部とはほぼ一致するが、各集落の宗教分布によって部分的には異なる。
- (79) 平戸市街では、プロテスタント・黒住教・天理教・金光教の教会が、いずれも明治期中頃から大正初期に建てられている（平戸尋常高等小学校1917：116-117）。

## 【文献】

- 板橋 勉 1949. 『聖サヴィエルと平戸切支丹』 新興芸術社.
- 板橋 勉 1960. 平戸の切支丹. 片岡弥吉編『切支丹風土記—九州編』宝文館：53-77.
- 市山了三・前田市太郎・松永金次郎・岩崎保司編 1982. 『紐差小教区100年の歩み』 紐差カトリック教会.
- 井之口章次 1966. 平戸の民間信仰（下）. 神道宗教43：39-52.
- 今里悟之 2012. 平戸島春日集落における信仰の場所と空間構造. 平戸紀要1：25-47.
- 今里悟之 2013. 平戸島村落の文化的景観における世界遺産化への可能性. 地理学報（大阪教育大学）37：77-93.
- 岩崎義則 2013. 五島灘・角力灘海域を舞台とした一八～一九世紀における潜伏キリシタンの移住について. 史淵（九州大学）150：27-67.
- 浦 恒一 1981. 民話・伝説・民謡. 平戸市教育委員会編『平戸島西海岸の民俗—春日、高越、獅子』平戸市教育委員会：43-54.
- 浦川和二郎 1927. 『切支丹の復活（前篇）』日本カトリック刊行会.
- 浦川和二郎 1928. 『切支丹の復活（後篇）』日本カトリック刊行会.
- 小崎登明 1992. 『西九州キリシタンの旅』 聖母の騎士社.
- 織田武雄・米倉二郎 1951. 度島誌. 小葉田 淳編『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団：169-179.
- お告げのマリア修道会監修 1980. 『紐差修道院創立100年誌』お告げのマリア修道会.
- 片岡弥吉 1957. 『長崎の殉教者』角川書店.
- 片岡弥吉 1967. 『かくれキリシタン—歴史と民俗』日本放送出版協会.
- カトリック長崎大司教区監修2008. 『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド（第3版）』長崎文献社.
- カトリック山田教会献堂100周年実行委員会編2012. 『道標—過去から現在、そして未来へ』カトリック山田教会.
- 上神崎小教区100年誌委員会編 1980. 『上神崎100年史—1880～1980』上神崎カトリック教会.
- 川上茂次 2008. 『キリシタン秘話—おろくにんさま』私家版.
- 川口洋平 2013. 長崎地方におけるキリシタン集落の形成. 長崎県編『長崎県内の多様な集落



- が形成する文化的景観保存調査報告書（論考編）』長崎県：469-472.
- 岸 俊男 1951. 平戸地方切支丹関係文献資料. 小葉田 淳編『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団：15-30.
- 木村勝彦 2012. 宗教ツーリズムにおける真正性と倫理の問題—長崎のキリスト教聖地をめぐる—. 山中 弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社：254-276.
- キリスト信者発見100周年行事委員会編 1965. 『カトリック長崎大司教区100年のあゆみ』カトリック長崎大司教区.
- 五野井隆史 2013. 平戸におけるキリスト教の宣教. 長崎県編『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保存調査報告書（論考編）』長崎県：64-81.
- 小林 茂・野口喜久雄 1983. 北部九州の藩営牧. 小林 茂編『九州北部における近世藩営牧の歴史地理学的研究—昭和57年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書』九州大学教養部人文地理学研究室：2-37.
- 近藤英吉 1933. ルイ・アルメーダの生月伝道. 平戸之光8：30-34.（復刻1996）
- 近藤英吉 1936a. 平戸に於ける西教弘通史. 平戸之光22：13-19.（復刻1996）
- 近藤英吉 1936b. 平戸に於ける西教弘通史（三）. 平戸之光24：11-16.（復刻1996）
- 近藤英吉 1939. 平戸に於ける西教弘通史（十二完）. 平戸之光37：13-15.（復刻1996）
- 斎藤広志 1961. 社会. 神戸大学経済経営研究所編『黒島—出稼ぎと移住の島』神戸大学経済経営研究所：95-122.
- 坂井信生 2005. 『明治期長崎のキリスト教—カトリック復活とプロテスタント伝道』長崎新聞社.
- 桜井徳太郎 1977. 『日本のシャマニズム（下巻）—民間巫俗の構造と機能』吉川弘文館.
- 獅子村編 1918. 『獅子村郷土誌』獅子村.
- 末田智樹 2004. 『藩際捕鯨業の展開—西海捕鯨と益富組』御茶の水書房.
- 助野健太郎 1960. 生月の切支丹. 片岡弥吉編『切支丹風土記—九州編』宝文館：79-118.
- 瀬野精一郎監修 2001. 『日本歴史地名大系43—長崎県の地名』平凡社.
- 高見寛孝 2006. 『荒神信仰と地神盲僧—柳田國男を超えて』岩田書院.
- 田北耕也 1954. 『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会.
- 立平 進 1981. 信仰—かくれキリシタンの民俗. 平戸市教育委員会編『平戸島西海岸の民俗—春日、高越、獅子』平戸市教育委員会：32-42.
- 長崎県教育委員会編 1999. 『長崎県のカクレキリシタン—長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書』長崎県教育委員会.
- 中園成生 2004. 生月島キリシタン伝説考. 島の館だより8：2-19.
- 中園成生 2005. キリシタン時代における平戸地方の教会. 萩原博文・前田秀人編『海外との交わり・平戸—旧石器時代から現代まで』海外交流史研究会：28-44.
- 中園成生 2009. 平戸地方キリシタン概史. 島の館だより13：2-22.
- 中園成生 2011. 長崎県下かくれキリシタンの経済的背景. 島の館だより15：12-22.

- 中園成生 2012. かくれキリシタンとは何か. 島の館だより 16 : 2-22.
- 中園成生 2013. 九州西岸地域におけるキリシタンの信仰形態とその変容について. 長崎県編『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保存調査報告書(論考編)』長崎県 : 395-427.
- 中園成生 2014. 『カクレキリシタンの実像』における信仰認識と問題. 島の館だより 18 : 9-21.
- 長沼賢海 1928. 『日本宗教史の研究』教育研究会.
- 西向嘉昭 1961. 自然と歴史. 神戸大学経済経営研究所編『黒島—出稼ぎと移住の島』神戸大学経済経営研究所 : 1-26.
- 日本離島センター編 2004. 『SHIMADAS—日本の島ガイド(第2版)』日本離島センター.
- 野崎清孝 1988. 『村落社会の地域構造』海青社.
- 野村暢清 1988. 『宗教と社会と文化—宗教的文化統合の研究』九州大学出版会.
- 萩原博文編 1987. 西欧文献にみえる平戸城下町関連記述. 平戸市文化協会編『平戸城下町(改訂版)』平戸市文化協会 : 95-101.
- 塙 薫蔵 1933. 生月人文発達史. 平戸之光 8 : 5-30. (復刻 1996)
- 浜崎 勇 1959. 『南田平教会史』カトリック教会(長崎市).
- 紐差村編 1918. 『郷土誌』紐差村.
- 100周年誌編集委員会編 1985. 『信仰のあかし—宝亀小教区100年のあゆみ』宝亀カトリック教会.
- 平戸市生月町博物館 2009. 『生月島のかくれキリシタン(改訂版)』平戸市生月振興公社.
- 平戸市教育委員会編 1988. 『平戸市の文化財 24—平戸市内キリシタン遺跡詳細分布調査報告書』平戸市教育委員会.
- 平戸市教育委員会編 2009. 『平戸市の文化財 64—平戸島と生月島の文化的景観保存調査報告書』平戸市教育委員会.
- 平戸市市長室編 1967. 『平戸市史』長崎県平戸市役所.
- 平戸尋常高等小学校編 1917. 『平戸郷土誌』平戸尋常高等小学校. (復刻 1979)
- 古野清人 1966. 『隠れキリシタン(増補版)』至文堂.
- フロイス, L. 著, 松田毅一・川崎桃太訳 1978a. 『日本史 6—豊後篇 I』中央公論社.
- フロイス, L. 著, 松田毅一・川崎桃太訳 1978b. 『日本史 3—五畿内篇 I』中央公論社.
- フロイス, L. 著, 松田毅一・川崎桃太訳 1979. 『日本史 9—西九州篇 I』中央公論社.
- 牧 正美 1972. キリシタン村落根獅子の宗教と社会構造—「納戸神」信仰の社会学的考察. 哲学年報(九州大学) 31 : 115-147.
- 松井圭介 2012. ヘリテージ化される聖地と場所の商品化. 山中 弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社 : 192-214.
- 松井圭介 2013. 『観光戦略としての宗教—長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会.
- 松田毅一監訳, 東光博英訳 1991. 『十六・七世紀イエズス会日本報告集(第Ⅲ期第6巻)』同朋舎.

- 松田毅一監訳、東光博英訳 1992. 『十六・七世紀イエズス会日本報告集（第Ⅲ期第5巻）』同朋舎.
- 松田毅一監訳、東光博英訳 1997. 『十六・七世紀イエズス会日本報告集（第Ⅲ期第1巻）』同朋舎.
- 松田毅一監訳、東光博英訳 1998a. 『十六・七世紀イエズス会日本報告集（第Ⅲ期第2巻）』同朋舎.
- 松田毅一監訳、東光博英訳 1998b. 『十六・七世紀イエズス会日本報告集（第Ⅲ期第3巻）』同朋舎.
- 松田毅一監訳、東光博英訳 1998c. 『十六・七世紀イエズス会日本報告集（第Ⅲ期第4巻）』同朋舎.
- 松本仁之作 1931. 『生月のキリシタン』カトリック書店.
- 三間文五郎編 1936a. 平戸藩史考（前編）. 三間文五郎編『平戸藩史考（全）』平戸藩史考編纂会支部：1-306.
- 三間文五郎編 1936b. 平戸藩史考（後編）. 三間文五郎編『平戸藩史考（全）』平戸藩史考編纂会支部：1-336.
- 宮崎賢太郎 1996. 『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会.
- 宮崎賢太郎 1998. 平戸カクレキリシタンの信仰とその現状. 平戸市史編さん委員会編『平戸市史—民俗編』平戸市：201-253.
- 宮崎賢太郎 2001. 『カクレキリシタン—オラシヨ 魂の通奏低音』長崎新聞社.
- 宮崎賢太郎 2014. 『カクレキリシタンの実像—日本人のキリスト教理解と受容』吉川弘文館.
- 宮本袈裟雄 1984. 『里修験の研究』吉川弘文館.
- 宮本常一 1972. 『宮本常一著作集11—中世社会の残存』未来社.
- 村上直次郎訳、柳谷武夫編 1968. 『イエズス会士日本通信（上）』雄松堂書店.
- 吉島孝夫 2004. 近代における平戸の行政区区域の変動. 平戸市史研究10：3-7.
- 吉田収郎 1979. 『平戸中南部史稿—津吉嶋の歴史』芸文堂.